

中世曹洞宗切紙の分類試論（十）

——追善・葬送供養関係を中心として（下）——

石川力山

十 葬場の設置に関連して

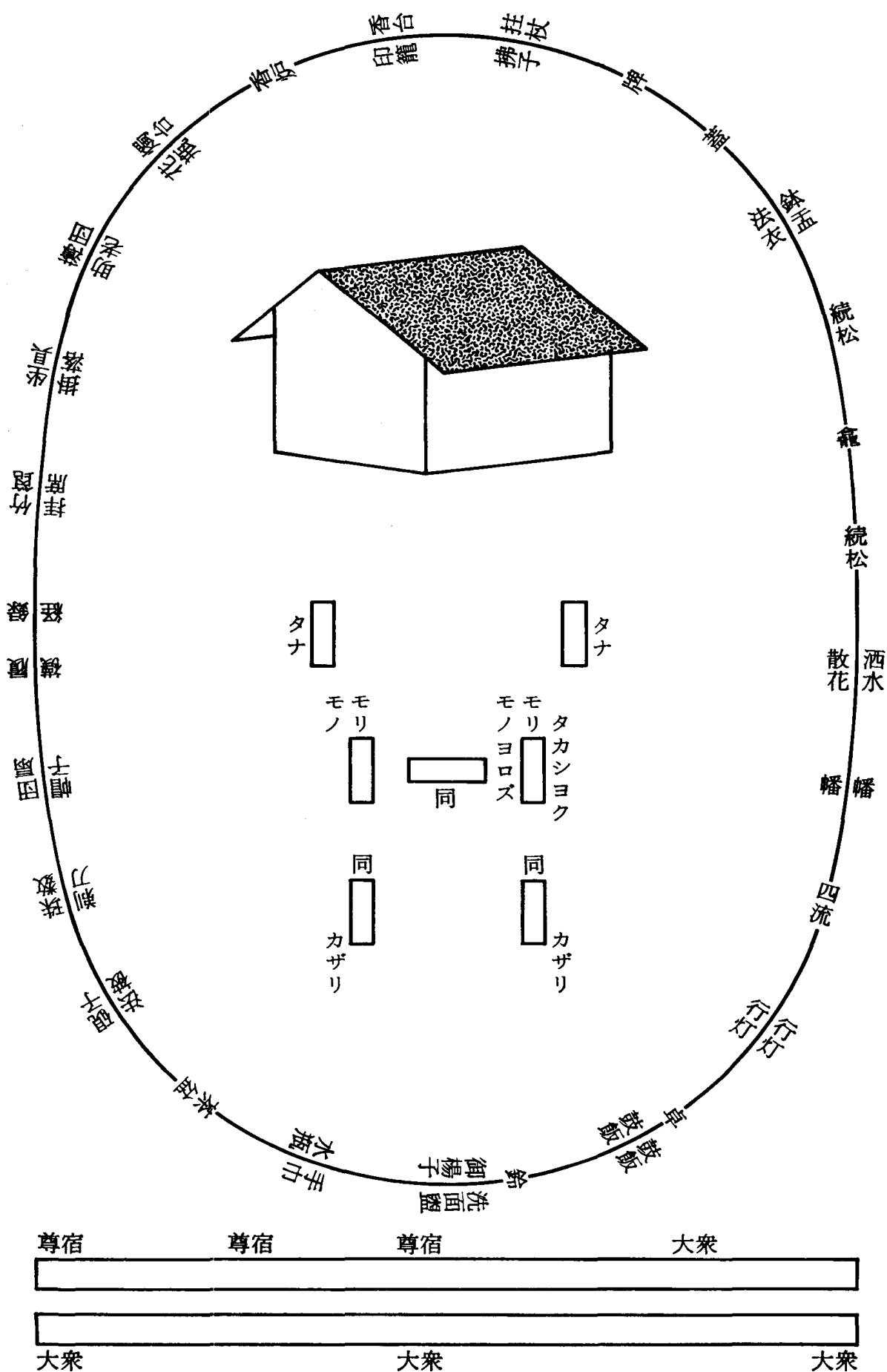
これまで紹介してきた諸切紙は、ある意味ではすべて、葬儀執行の前段階的諸手続きといつてもよい。勿論これら一連の諸儀礼全体が葬送儀礼であるとする理解も成り立つことはいうまでもなく、中国の礼儀の基本となる『礼記』（喪大訳）などでも、復（招魂）・入浴（湯灌）・斂（納棺）⁽⁵¹⁾・殯（もがり）等の儀礼は葬送の一部として位置付けられており、唐代の民間儀礼においてもほぼ同様のことが行われていたことも知られている。⁽⁵²⁾ただし、やはり葬送儀礼の意味なり機能が最もよく発揮されるのは以下に述べるような諸儀礼であり、民俗的儀礼とは異なる仏教々理の援用も豊富となる。そこでまず第一に、儀礼が行われる葬場の意味に関する切紙について見てみる。

葬場とは、引導や荼毘、その他の諸仏事が執行される場所

のことでのことで、尊宿葬法に準拠して棺を安置した龕が設けられ、周囲には四門が設けられる。これは釈尊の發心・修行・菩提・涅槃の生涯になぞらえたもので、『諸回向清規』にもすでに「龕堂火屋之図」として図入りで示されているが、これに関する切紙は比較的多く見られる。この葬場には通常行列を作つて赴くのが仏教各派共通に見られ、そこには花籠などのような民俗儀礼的要素が種々見出される。次に尊宿葬法の例であるが、行列の次第を記した、永光寺所蔵、年時不明の「尊宿荼毘 次第」という切紙を紹介しておく（次頁）。

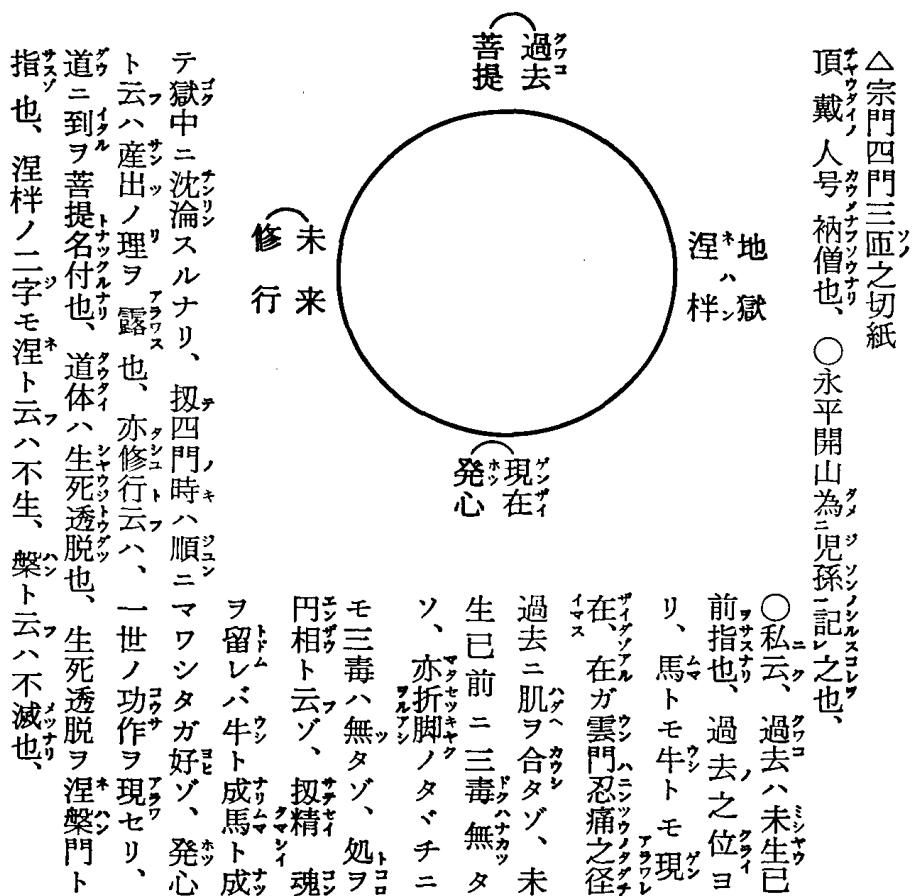
この切紙は、中央に棺を置いた龕のまわりを葬列が巡つていることを示すが、これは右遼三匝と呼ばれる儀礼で、元来はインドに起源を有する高貴な人に対する礼法であり、釈尊の葬儀に際しても摩訶迦葉が仏龕を右遼三匝、あるいは七匝したという経説があり、これが仏教による葬儀に取り入れら

(端裏) 尊宿茶毘ノ次第



れたものである。⁽⁵³⁾ ただし民俗儀礼としては死靈がもとの家に
もどつてくるのを防ぐ呪法であるといふ。次に永光寺(石川

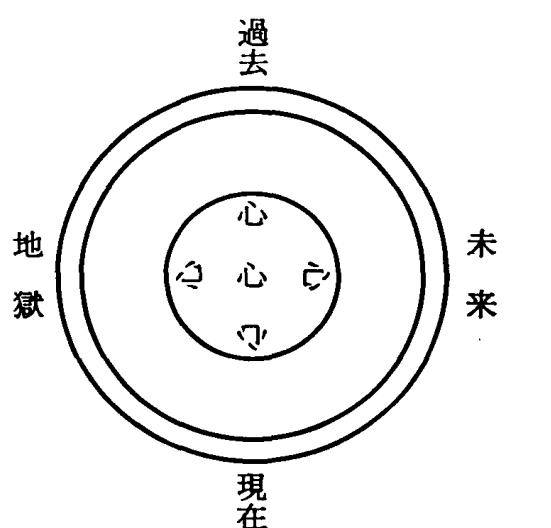
県)・正龍寺(埼玉県)・西明寺(愛知県)・広泰寺(三重県)所
蔵の、四門及び三匝に関する切紙を列挙しておく。なお宗門
の所伝では三匝のみで、七匝の例は見られない。



右ニ逸三匝、左ニ逸三匝也
知識ヲ左旋也
旨慶安二己年十二月九日 仏陀山翁廣嚴

附与正安全長居士畢
(永光寺所藏)

(端裏) 四門三匝大事



四門四縁合成境也、
大覺世尊入般涅槃時、
宝棺離地八尺上拘尸那城廻七匝也、
宗上右七匝、今三匝、
同意也、七字一乙、古
今上下始終一般也、三匝回ニ三世、三世一時
通達也、十方通達隱頭、
自由無碍自在儀也、回
収所妙覺果滿靈地安箸

也、畢竟心不墮虚儀也、三匝心三点也、往古七匝也、
涅槃七匝也、七匝最也、
也、今於洞谷重書之者也

洞谷良叟(花押)
(永光寺所藏)

(端裏) 四門切紙

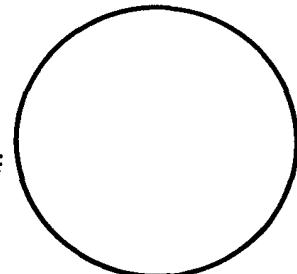
四門三匝図

第心門
眼在

正
面
裏

修行門

地獄



四門打門三世往来、地
獄等器界同一円相、出
円通入円通之謂、右邊
三匝表心三点、法身般
若解脱等也、右邊三匝
之後、邊三匝亦可也、
古時用此義、即生死涅
槃、順逆一如之謂也、

右嫡々相承至□

(正竜寺所蔵)

(端裏) 四方門之切紙
宗門之四門三匝之図、頂戴之人、衲僧号也

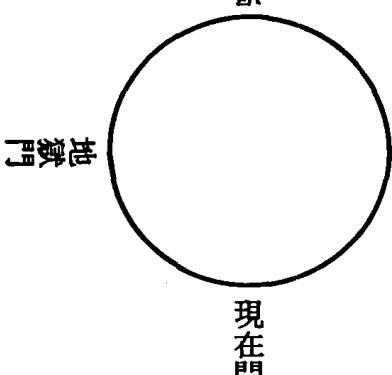
秘密永平開山為兒孫、
一人許之也、

過去ト云ワ未生已前ヲ

指スヘ、過去之一位ヨ

リ馬共牛共現在シタ、
在ルガ雲門ハ折脚径過
去ニ肌エニ付ケタ、未

生已前ニ三毒ワ無ツ
タ、亦折脚ノ径、三毒ワ
無ツタ、円相ト云精魂



于時寛永十三丙子年六月吉日

今謹伝授之天牛首座

(西明寺所蔵)

(端裏) 宗門四門之切紙
宗門四門之三匝之切紙、頂戴人号、衲僧也

永平開山為兒孫記之也、

私云、過去ト云ワ未生

已前ヲ指也、過去位ヨ

リ馬トモ牛トモ現在シ

タゾ、在ル雲門ワ忍痛、

タゞチ過去ニ肌ヲ合タ

ゾ、未生已前ニ三毒ワ

ナカツタゾ、処ヲ円相

ト云タワ、扱テ精魂ヲ

留レバ牛トナリ馬トナ

ツテ獄中沈論スル「

ヲ留レバ牛トナリ、馬ト成ツテ、獄中沈輪スルゾ、亦四門時キ
モ順ニ回ツタガ好イ、発心ト云ワ産出、理ヲ露ス也、修行ト云ハ
一世、功作ヲ現セリ、道ニ至ルヲ菩提ト云、道体ワ生死透脱也、
生死ヲ透脱スルヲ涅槃門ト云々、涅ハ不生、槃ハ不滅」、
右邊三匝左邊三匝スル也

從天童如淨禪師永平道元和尚謹伝授之也、

ヲ留レバ牛トナリ、馬ト成ツテ、獄中沈輪スルゾ、亦四門時キ
モ順ニ回ツタガ好イ、発心ト云ワ産出、理ヲ露ス也、修行ト云ハ
一世、功作ヲ現セリ、道ニ至ルヲ菩提ト云、道体ワ生死透脱也、
生死ヲ透脱スルヲ涅槃門ト云々、涅ハ不生、槃ハ不滅」、
右邊三匝左邊三匝スル也

クルゝ、道体ワ生死透脱ゝ、生死透脱ワ涅槃門ト指スナリ、問云、菩提ト云ワ不生、(涅槃タ)槃ト云ワ不滅也、右逸ル「二匝、左逸「

三匝于時寛永十七年三月吉日

金龍山海眼院住持融山叟（印）

今与英利畢
(廣泰寺所藏)

西点	南角	東無
キヤク カク ラク	キヤン カン ラン	キヤウ カウ ラウ
バク アク	バン アン	ハウ アウ
え	れ	れ
菩提	修行	発心

また珍らしいものとしては、四門にそれぞれ悉曇を配して密教的意義付けをした、小田原市香林寺所蔵の切紙を紹介しておく。これには標題が欠けているが、仮りに「悉曇四門切紙」と題しておく。

于時元和四
午戌年 極月吉日

沙門驚道

〔悉曇四門切紙〕

門此國得心之人者、八方通達之衲僧也、

三身圓滿之如來也、畢竟阿字本不生之大冥、阿部曇胎藏之種

子、可、秘々々、東西南北四方之角添而八方八葉之蓮華也、是龍天護法善神与、曰也、黒面為、陰、赤梵字之面、為、陽、八手之意之字、摩頂守護之仏手与、爰本意之手与云也、總空乾坤宇宙其儘之龍天善神之形相也、萬法護法善神也、頭々本位仏体也、故我為法王於自在与仏說者、此一大夏因縁秘法、云也、本尊添置而大夏也、妙不思儀不可說之図形也、如是能々可、秘可秘、空堅

々々、胎金兩部之參禪、能々可ノ秘、

また葬儀には、一諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂」という四句一偈の無常偈を、一句ずつ書いた白幡を四流立てて葬列が形成されるが、これは『禪苑清規』(卷七、亡僧)⁽⁵⁴⁾に、

亡僧初化、即澡浴剃頭、披掛子、坐桶内以龕貯之、置延寿堂前、設香花供養、并剪造白幡書無常偈。(Z2—16—5, 457C)

とあるのに基づくもので、人の死という事態を諸行無常の理でとらえようといふものであろう。インドにおける仏教的葬儀法が、『無常經』という短経を読誦するといふ、極めて簡単な儀礼であったこととも軌を一にするもので、曹洞宗所伝の切紙にはこの四句の意に関するものがやはり比較的多い。

そこで次に、この四句文関係の切紙の中から、西明寺所蔵、

寛永七年(一六三〇)、同十三年(一六三六)のいずれも同寺九世鉄山天牛所伝のもの二種を掲げる。

(端裏) 四句文参禪

諸行無常、代云、森羅万像ハ皆ナ消スル物トミレバ、無常デ走、ヘ云、夫ノ証拠、代云、本来無一物、何处在塵埃、ヘ云、恁麼時如何、代云、清風掃、地有^シ何極^{リカ}、ヘ云、是生滅^ス、樂トタノシミ用、代云、此身^シ捨テ^ム社本分地ニワ至郎ズレ、ヘ云、何トタノシンダゾ、代云、本ノ墨ミトナ郎ズ迄デ、走、ヘ云、行李ヲ、代云、山本山水元水、ヘ云、四句ヲ畢竟ゼヨ、代云、心生^{レバ}種々法生^{メス}、心滅^{スレバ}種々法滅^ス、大夏^ク、

于時寛永七年仲春吉日 天牛(花押)

(端裏) 四句文之切紙

諸行無^常上ヲ、代、森羅万象ワ皆消スル物ト見レバ、無常デ走、師云、夫ノ証拠ヲ、代、本来無一物、何处在塵埃、師云、恁麼時如何、代、清風掃地有^シ何極^{リカ}、師云、是生^ス——樂トタノシマウヲ、代、此ノ身ヲ捨テ、コソ本分ノ地ニハ至郎ズレ、師云、何ントタノシンダゾ、代、本トノ墨トナ郎ズ迄デヨ、師云、行李ヲ、代、山ワ本山、水ワ本水、師云、四句ヲ一句ニ畢竟ゼヨ、代、心生^{レバ}種々法生^{メス}、心滅^{スレバ}種々法滅^ス、

今時之相ハ幻化^ス

到レバ大極^ス

(端裏) 四句文之切紙

吉祥山永平開山道元大和尚四句之文之切紙

今時之行ハ幻化^ス

爰ヲ尽シテ

また、同じ四句文に関する切紙でも、図を伴うものが香林

寺所蔵の切紙類の中に存するので、慶長十九年(一六一四)宗達所伝のものと、寛永十三年、雪庵元叟所伝のもの二種を掲げる。

于時寛永十三丙子年六月吉日

○ 祝迦牟尼仏大和尚 天牛首座

● 生滅々已寂滅為樂^ス無極是ハ大極ヲ尽此地到也

(端裏) 四句之間^(マツ)之切紙

吉祥山永平禪寺開山道元大和尚還門戸大夏也、

○ 諸行無常 是生滅法

● 今時之相幻代也、憂^チ盡^シ至^ル大極也、

● 心 祝迦牟尼仏大和尚

夜半流傳之北也、大夏之切紙也

砂門宗達拜

于時慶長拾九季 無極也、是大極^ス盡^シ此地至^ル也、

生滅々已寂滅為樂^ス

(端裏) 四句文之切紙

吉祥山永平開山道元大和尚四句之文之切紙

今時之行ハ幻化^ス

爰ヲ尽シテ

○—諸行無常、是生滅法

師云、諸—常ヲ、代、森羅万象ハ皆ナ消スル物ト
見レバ、無常デ走、師云、証拠ヲ、代、本来無一
物、何—^ニ埃、師云、生滅—已ヲ、代、清風掃地、
有^ニ何極^カ、

心

—釈迦牟尼仏大和尚

寂滅—樂ヲ、代、此身ヲ捨テ、コソ本トニハ有郎
ズレ、師云、何ントテ樂タソ、代、只元ノ墨ト那
郎マデヨ、師云、行李ヲ、代、山元山水元水、
—生滅々已、寂滅為樂

無極^ヘ、是ハ大極^ヲ尽^メ此ノ地ニ至ル^ヘ、

師云、四句共ニ一句ニ畢竟ゼヨ、代云、心生法、
附授是尊禪納

寛永十三丙午季初夏吉辰 雪庵元叟

(印)(印)

十一 下炬・続松関係について

葬列にはこの四句の無常偈を書いた白幡四流のほかにも、提燈・位牌・供物・閻伽・天蓋・華籠などさまざまの品物が会葬者の手によって運ばれるはずであるが、切紙にはそれらについては殆んど触れるところがない。次の儀礼は、荼毘式の下炬（下火・秉炬）あるいはそのための続松に関するもので、これに関する切紙の所伝も極めて多く多彩である。

荼毘すなわち火葬という遺体処理の仕方が、東アジア社会では極めて特異な方法であったことは周知のことく、中国や日本等には仏教渡来以前にはなかつたと考えられる。これが仏教渡来とともにアジア社会に広く侵透し、特に釈尊を親う古代の朝鮮半島や日本の帝王達によつて採用されるようになると、厚葬の一方法として広く上級の遺族達にも受容されるに至る。しかしこの方法がさらに一般民衆の間にまで広がるのは、禅宗の渡来以後のことと思われ、釈尊の荼毘に摩訶迦葉が炬（たいまつ）をとつて火を点じたという経説⁽⁵⁵⁾にならうやり方として定着する。しかも、黃檗希運が母の死に際して、法語をとなえ大声に一喝して炬火を投じ母を済度したといふ引導の起源は、一連の葬送儀礼におけるクライマックスとして重要視され、この引導の法は仏教各派に共通して成立するに至る。その起源が禅宗とされることも起因し、また『禪苑清規』などでも明確な規定があることから、その儀礼執行の方法を説いたり、下火の意義や続松（たいまつ）の使用の方法などを説く切紙は極めて多い。そして、続松で点火する儀礼は、実際に葬場に薪を積んで遺体を安置し、実際に火をつけることが本義であり、皇室や上級貴族による「山作所」⁽⁵⁷⁾の設置はそれが実際に行われたことを意味するが、多く

は、先端に火に摸した赤紙を付け、続松に擬した道具を作つて、これで火を点する仕草をするだけの、極めて儀礼的なものになる。またこの時、続松で一円相を画く動作を行うが、円相は古くより、たとえば仰山慧寂が接化の手段として「円相六義」なるものを用いたとされるように、禅旨を示す好箇の手段としてしばしば登場する。したがつて下火や続松に関する参には、下炬の意義や続松の意味するものと同様に、円相の意義についても触れることが多い。以下、永光寺・広泰寺・香林寺・正龍寺・西明寺の順で、各寺所蔵の切紙類の中から、下火（炬）・続松、及びその参に関するものを列挙しておくる。

(端裏) 下炬大事、

先導師釈迦大師、死人迦葉和尚也、続松釈尊急度拈玉タル此一華也、金婆羅華者、心華也、心華者、心火也、釈迦大師急度指^{サシテ}百万衆見セシメ玉所一円也、故火点テ急度一円相ヲ打スルコトハ、自身佗身無二、化身本身仏衆生一致ニシテ、無差別也、死人無相、我身化相、導師ハ至覚、死人ハ本覚、拈華微笑至本不二也、不二ヲ以成等正覺云也、導師出世^{ナリ}故大陽地生火赤続松也、是ハ心火影也、死人彼趣向スル故、老陰淨場、死火黒続松也、是真心火也、真火心火合シテ新亡、化身焼払テ、根本無形実相ニ安住セシムル也、正本躰、偏影相也、死人導師也、回二在物ヲ重置テ、其体失ザルコト也、不二シテ

何^{イヌレ}躰モ無時、生死透脱也、卓上続松ヲ一把置タル所回也、急度一円相打所互也、此ガ仏身正躰也、亦智識一大事有^ミ秘伝、拈ジテ閉目シテ低声四句文ヲ唱^{ハサ}テ、活ト両目ヲ見発^{ヨビ}テ空ヲ見ナガラ法語ヲ唱^{ハサ}テ了^{ワタチ}全身虚作^{キヨニナツ}テホカト一喝スル也、此^{ヨコ}デ無心無相無念ヲモ放下スル也、少^{ソット}モ妄想出レバ新亡沈淪スル也、結句猶大事也、參可^ニ智得^ス者也

洞谷永光現住呑良書之（花押）

（永光寺所蔵）

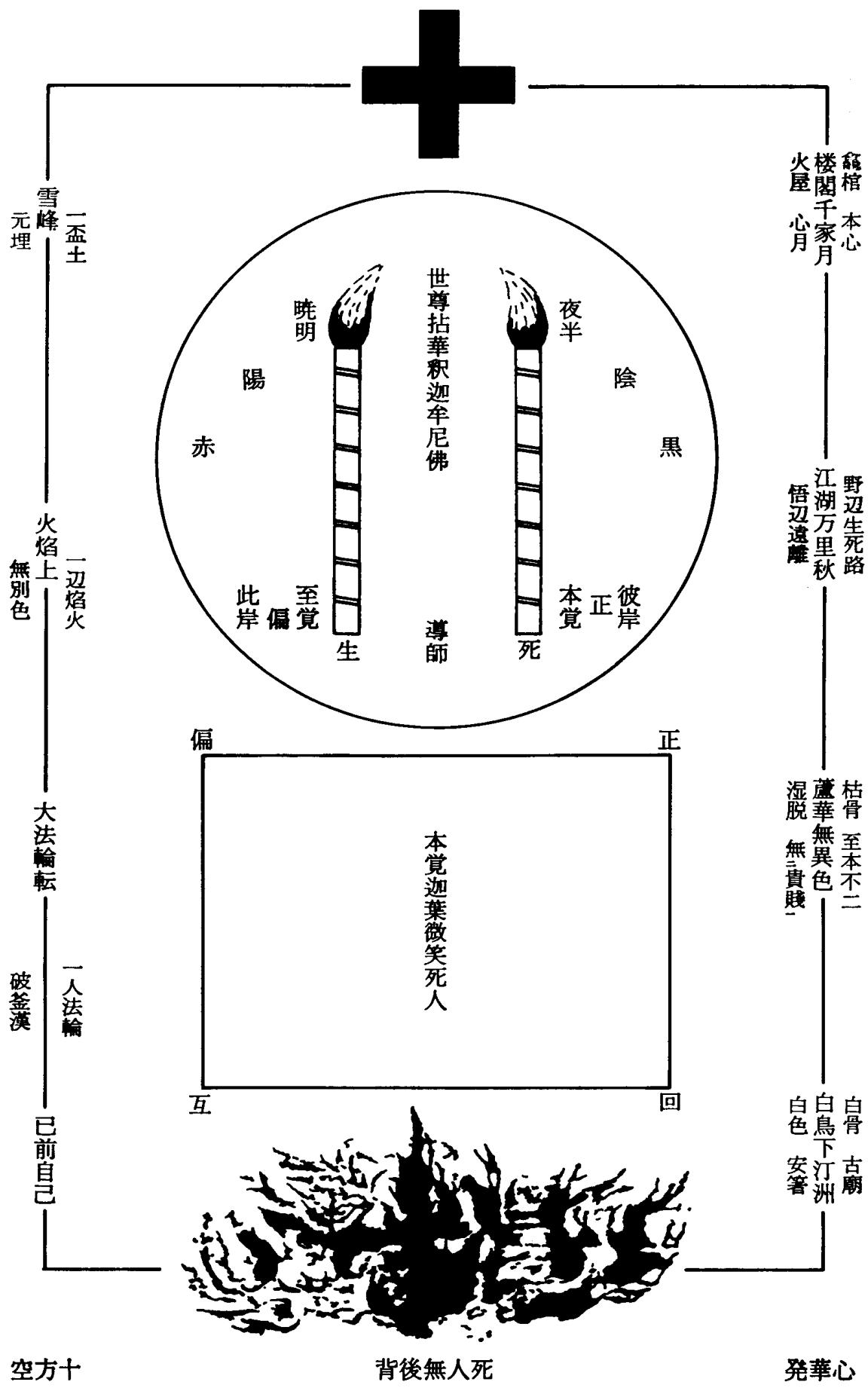
没後円相

没後之円相ヲ云、爰ハ計交安排不渡、數珠デモ坐具デモ一寸ト取^{トヨ}テ急度睭眼シテ円相ヲナンシテ、末後一句始テ至^ル牢閻、師云、夫句テニハヲナヲセ、拳、末後一句始^ル至^ル牢閻、先焼松ヲバ左リノ方タヨリ二本焼松ニ一本ニ火付^ケテトボシ、分ケテ右ギニ居モノト三度ナゲ合セテ、三度目ニ右ギヨリ出ス処ヲ一寸ト取^ツテ円相ヲ作シテ下炬ヲスル也、円ハ始終一般也、閻魔王ノ総門ノ額ヲ牢閻ト打ツタ云也、生ガ死、死ガ生也、卒トモケリウナイゾ、急度睭眼シタ、眼底ヲバ仏眼魔眼モ及バヌゾ、是ヲ生死透脱ノ眼コト云く、

（永光寺所蔵）

曹洞大事

私、心事乱ルトハ、此一炬火取發ニスルヲ云也、



寛永十年夏於当山改之 洞谷香良書之 (花押)

(永光寺所蔵)

続松之切紙大事之參得

一、師云、一息截断引入時ハ、眼依出カ耳、鼻依出共云、在共

本性ハ出息入息ノ風引入也、屈度引入カ心ノ入羊ダゾ、有共引

入計デハ有間布ゾ、引入タラバ出様カ有ゾ、出タラバ納様ガ

在ゾ、來時ニモ阿字息風、去時ニモ阿字息風、是ニ何隔在

ゾ、喝ト出ヨリ何タル心デモ七日ハ不納ゾ、其ナラバ心ノ有

処ヲ尋来、答云、北斗在成、北枕ニナラスト云モ此北斗エ送

カタメ、七日過能風ト戯、父ノ入息ノ風ニ乗、母蓮華ニ移也、

知識ガ北向立ト云モ、此北斗ト示ガタメナリ、薄墨色ノ袈裟、

掛ト云ハ、唐衣也、師云、明松云、学云、父陽テ走、師云、

一円相、揮ハ如何、学云、天地一枚走、炬ヲ前ニ急度堅タル心

ハ、世納走、喝ト抱タル心ハ、此世界生出タル心也、師云、

引導有ヲ云、学回云、内外デ走、父ノ陰ハ前衣生、母ノ姪ハ

後依下也、是ヲ桂内外共云也、母ノ胎内工宿時、天ノ清依陽

來迎共云、此世界生時母ベンソウノ頂依五色ノ水カ下ル也、此

水テ水戸ヲ開ナリ、時ヲ松ト云モ此水ヲマツナリ、法界デハ横

雲イヌハシリニ在バ下ル也、心得大事、師云、天二十八宿、学

云、兼中デ走、師云、此心ヲ重転來、学云、母胎内デ両足テ

三光星ヲ踏ソロエテ両手腮ノ下ニアテ、出息ガ二十也、是ヲ

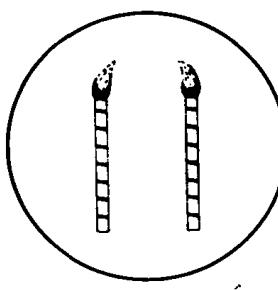
山王二十一社共云也、八宿ト云ハ八ノ統節也、人間形三十二相
トハ手足ノ廿ノ指、十二ノ大骨、帝釈天ト云モ悉白毫ノ星ニ現
也、万事見間白毫ノ心得肝要也、爰ヲ悉悟入ハ願ベキ仏ナシ、
千七百則ヲ打破現、賤キ俗人ナドニ於見聞者、仏祖御罰可レ
蒙者也、可レ秘シ。

(永光寺所蔵)

(端裏) 下火切紙

下火切紙

亡者荼毘下炬之話頭、徹處者一円相也、師、以炬火打円相
様、代云、円相者三世諸仏之道場、衆生成仏之直道也、師云、
已ニ諸仏之道場、為何引暗昧之衆生也、代云、諸仏衆生同
一路、師云、當著ノ一句、代云、諸仏衆生同一体、菩提煩惱本
不二、師云、拋於炬火、結句意旨如何、代云、草木国土悉皆
成仏、天堂地獄總是一家、龐居士看經話、亦類則也、師云、居
士翹足機一円相之眼也、注曰、尽十方世界一円相、此時
無転足他世界、何更有群魔眼睛可及乎、師云、畢竟如何、
代云、天地同根、万物一体、



(広泰寺所蔵)

先ツ拈華之時キワ、花ヲ拈スルガ燒松也、何一バ、心花ヲ拈ジタゾ、心花ワ円相ノ、亦微笑ガ死人也、微笑ヲ(ママ)本学ノ迦葉ニアテタゾ、至学本学一致ノ時キガ同時成道タゾ、摩訶大迦葉ニ付属ト云ハ、大イハ一人ト云心ロタゾ、 死スレバ釈迦モ達磨モ一人タゾ、何一バ、同条雖レ生同条死セヌゾ、亦向見レバ一人くト自ラノ伝ダゾ、サテ社ゾ、世尊三昧一迦葉不知云タゾ、亦鍬キ云ズルトキワ、世尊拈ジタガ鍬キタゾ、世一バ此ノ鍬キ以テ仏種子ヲ耕シタゾ、微笑ハ土穴ノ口チノフタゾ、八万ノ大衆ワ皆ナ死処ニ不知案内処ニ依テ黙タゾ、亦曹洞之機之時ワ、樓閣ト云ハ、火屋、棺内、夏タゾ、千家ノ月ト云ハ、心月本心ノフタゾ、汀洲ト云ハ、鳥リ辺野ノフタゾ、貴人モ商人モドスモカツタイモ、尽くアツマルヲ云タゾ、万里ト ヨリ死ニ至ル迄デノ路次スガラノ底タゾ、秋ト云ハ本位タゾ、芦花ト云ワ四百四病ヲ受ケテ死スルニ依テ、是レワ尽キタゾ、亦化生ト云テ朝ニ生ジテ暮レニ死スルモアルゾ、是レヲ不尽ト云タゾ、在レドモ無異色ト云ハ、烟リノ色ハ一ツデ別色ハ無イゾ、罕ノ至学ノ世尊モ本学ノ迦葉モ烟ノ色ハ一ツタゾ、白鳥ト云ハ白骨ノフタゾ、汀洲ト云ハツガフタゾ、下ルト云ガ本位 死ノ性ヲ受クル者ノワ、皆ナ白鳥下ル汀洲一ゾ、樓閣ヲ円相ニ当タゾ、千家ヲ死人ニ号シタゾ、千家ト云ワオシナベテト云心ロタゾ、雪峰ト云ワキヨメテツカニナシタヨ、亦雪峰火焰上時キワ火

続松之切紙 注云

焰上ニ向テト云ガ道師(衍カ)師タゾ、亦火里ニアル本心タゾ、本心ガ死人タゾ、法輪不転ト云ハ、火焰裏ワ円相中元里玉タゾ、ソレハ死処斗リタゾ、サテ落処ガ テ一法輪ヲ点ジテ生飯シタゾ、云ウ本位ニ当テタゾ、雪ハキヨムルト云字タゾ、峰ハム子タゾ、ハイヨセノフタゾ、ミ子ト云ハ心ガフタゾ、罕ノ此ノ一盃、土ハ達磨モノガレヌゾ、咒也、道師ノ朝ニ引導シテ暮レニ死スルゾ、向見レバウ カハ万歳モ東方朔九千歳モ蛾蜍、一時キタゾ、此旨子ヲ字以テ引導シタラバ地獄ワ墮スマイゾ、此心十二時中く只如 タゾ、切紙二通在之、于時寛永十六卯季金龍山海眼院密山派代々

融山叟附英刹者也

(広泰寺所蔵)

忘冥授戒之血脉
(端裏) 没后作僧之血脉

同下炬之大夏 長円

日本初祖永平道元禪師

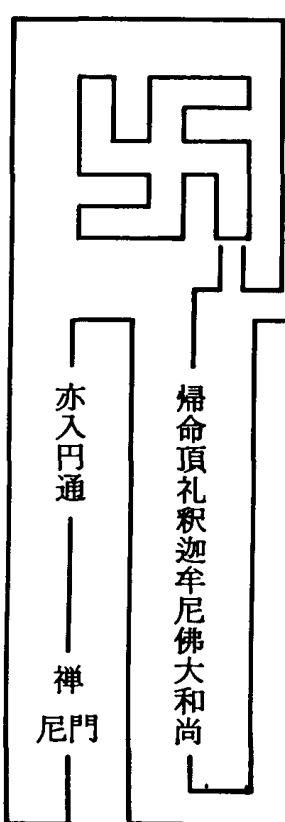
没後作僧之血脉 徒円通出

衆生

帰命頂礼釈迦牟尼佛大和尚

亦入円通

禪尼



同下炬旨大夏

参云

師云、什ント死漢ガ真ノ出家デワ在ルゾ、代云、念慮議情之切レタガ真ノ出家デ走、師云、其ノ証拠ヲ、代云、外ニ無ニ正戒、内ニ無ニ邪念一

于時寛永十五戊寅年菊月吉辰

(三宝印)

最乗禪寺現住香沢和尚 (花押)

直伝報恩院現住長円叟書

(三宝印)

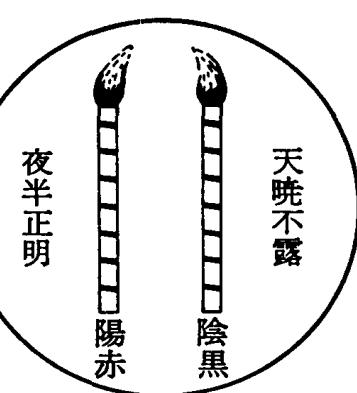
(香林寺所蔵)

(端裏) 炬下切紙

炬下切紙 楼閣千家月、江湖万里秋、扱何トシ田ゾ、

芦花無異色、白鳥汀洲下、扱何トシ田ゾ、

正
偏
互
回



師云、炬下ヲ云エ、学向レ師一喝、師云、一円相云エ、代云、主デ走、師云、主定、学放身、何用カ在、師云、死人、代云、木

薪デ走、師云、其上デ着語ヲ、代云、無ニ上正戒相、無ニ邪念心ニ、

師云、其句ヲ説破セヨ、代、本無イ夏デ走、師云、一句作麼生、代、諸行無常、一切空劫、遇ニ如來大円覓、師云、木模様ヲ、代、木人立打鼓、石女ウゴイチア舞、代身、師云、其上レ燒払、一句云エ、代云、フットフク也、

曹洞大夏

道元和尚秘密

通幻大和尚秘密參

于時慶長拾九季

(砂門宗達撰)

(香林寺所蔵)

(端裏) 曹洞機切紙

道元大和尚秘密之書也

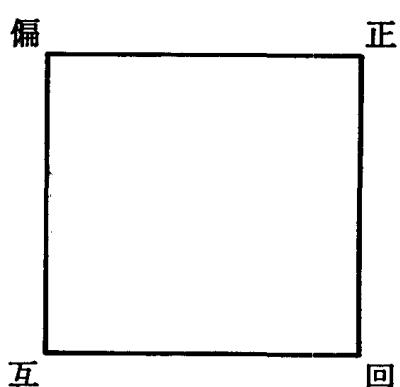
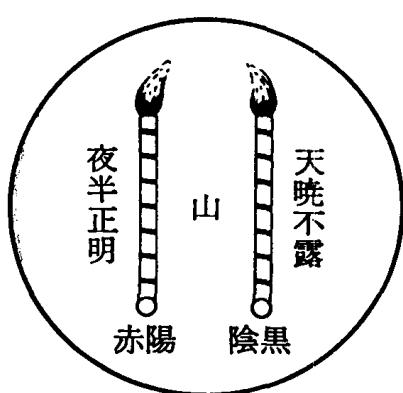
○樓閣千家月——扱而難トシタゾ、(同)

○江湖万里秋——扱而難トシタゾ、

○芦花無異色——扱而難トシタゾ、

○白鳥下ニ汀洲——扱而難トシタゾ、

正
偏
互
回



曹洞機、師云、曹洞宗云エ、代、天暁露不、夜半正明、師云、猶子細、代、曾ニテ知ラズ、心ワ、是レガ當人也、不知々ト

到タ家デ走、呈ニ、天暁不露ノ更定ラスゾ時キ曹洞之機タゾ、

師云、機ノ聞ユル用ニ、代云、師ノ前ニ至ツテウルノ渡ヲ流ノ

モ忘然トソ立也、トコガ初メヤ郎、トコガ終リヤ郎、師云、徹

処句ヲ、代云、天暁不露、夜半正明、心得ワ、曹洞宗デハ天暁

不露ノ処ガ在ルゾ、向ウ計リ云テ置バ機空劫ニ沈ムゾ、呈ニ、夜

半正明トグルリノトシテクル也、時始メ終リガ見エヌゾ、時

ガ回互円転、玉機ノ端シ無キガ如クタゾ、畢竟破闕ト心得可キ

也、引而古歌云、君ミ住バ爰モ雲井ノ四座ナレト猶ヲ恋シキワ

城マナリケル、亦、君住バ爰モ雲井ノヨサノ浦ラアマノハシタ

テ城コナリセバ、能ク心得肝要也、大夏ノ

于時元和四年極リヌ吉日
曹洞機之図 伝授

鷺道

(香林寺所蔵)

正、樓閣千家月ハ諷テ何ント、回、江湖万里秋、諷テ何ント
シタソ、
大夏々々、可秘ノ

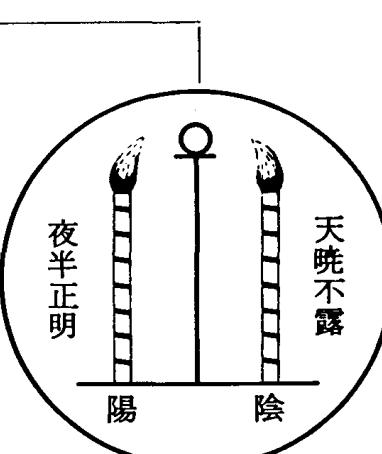
不露デ、更ニ□ラス時キ曹洞ノ家タソ、師云、機ノ聞ユル羊ニ、代、学師ノ前ニ分ツテウルノ涙デ忘然トシテ云、ドコガ始マリヤ郎ドコガ終リヤ郎

ト拳スノ、師云、徹処ニ着語ヲ、代、天暁不露、夜半正明、心ハ、曹洞ノ家デハ天暁不露ノ処ガ有ルト向斗云テヲケバ、機空劫ニ沈ムトニ、夜半正明トクルリト回シタソ、時キ始終

ガ見エヌゾ、時キ回互宛転玉機無端如クデ走ソ、畢竟什麼ト心得可、大源門戸デハ君ミ住メバ一セバ、快庵和尚ハ本覺瑞如此ト被成、亦華叟派デハ、君住メバ一都コナリケリ、密

山派デハ火裡蓮華董ニ手裏、芦華無異也、白鳥下汀洲、諷テ

何ントシタゾ、何ソノソ、



樓閣千家月、諷テ何ントシタ

ソ、江湖万里秋、諷テ何ント

シタソ、師云、曹洞ノ機ヲ、

代云、天暁不露、夜半正明、

師云、猶ヲモ巨細ニ、代、曾

不知、心ハ、是ガ當人也、不

知ニマデ為タ家ナホト、天暁

不露デ、更ニ□ラス時キ曹洞

ノ家タソ、師云、機ノ聞ユル羊ニ、代、学師ノ前ニ分ツテウ

ルノ涙デ忘然トシテ云、ドコガ始マリヤ郎ドコガ終リヤ郎

ト拳スノ、師云、徹処ニ着語ヲ、代、天暁不露、夜半正明、

心ハ、曹洞ノ家デハ天暁不露ノ処ガ有ルト向斗云テヲケバ、

機空劫ニ沈ムトニ、夜半正明トクルリト回シタソ、時キ始終

ガ見エヌゾ、時キ回互宛転玉機無端如クデ走ソ、畢竟什麼

ト心得可、大源門戸デハ君ミ住メバ一セバ、快庵和尚ハ本覺

瑞如此ト被成、亦華叟派デハ、君住メバ一都コナリケリ、密

山派デハ火裡蓮華董ニ手裏、芦華無異也、白鳥下汀洲、諷テ

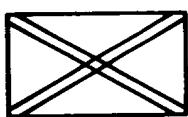
何ントシタゾ、何ソノソ、

大夏々々、可秘ノ

(端裏) 統松之切紙也

○道元和尚 大仏堂 建立 秘密書之也

曹洞機



偏、白鳥汀洲下、諷テ何ント、互、諷テ何ントシタソ、畢竟也、

長亨二年 伝附了也、

于時寛永十三丙初夏吉展仁改之

附是尊老納

(印) (印)

(香林寺所蔵)

私云、最初モ天晩不露モ夜半正明也、
中者如是、向上^モ如是、

(端裏) 続松截紙

夫ノ句ヲ説破セヨ、代、本無^モ夏デ走、師云、其上デ一句作麼生、代、諸行無常、一切空、即見如來、大田覓、師云、木ノツミ羊ヲ云エ、代、フット吹クモヨウヲ作シテ、木人立テ打鼓、石女^モ作^テ舞、師云、燒キ^モノ上デ一句、代、何云イ夏ガ走ゾ、此外不露等^モ、^モ旨得^ル心肝要也、是者衆生救度ノ心得也、

通幻判

從永平室中直伝

詔堂拝

(正龍寺所蔵)

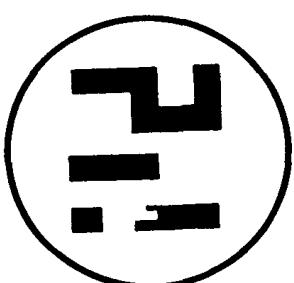
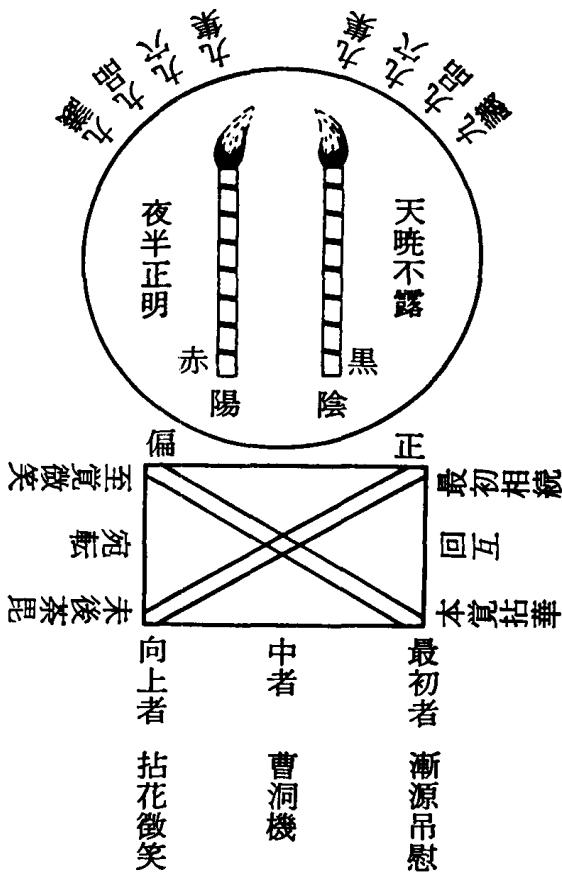
(端裏) 下炬之切紙

永平開山道元大和尚伝授之時也

堅第三際也

自他一致義也

横亘十方也 何處有南北
○者○也、一片ノ閑田地之義也、此大夏
右ニ三度取^ス渡之有礼、世尊時迦葉阿難其徒也、是者知識之時、



迷故三界城
悟故十方空
本来無東西
不智不^モ下炬スル夏非ガ夏也、
○者○也、一片ノ閑田地之義也、此大夏

畢竟者○出□ 〔大夏也ト云也〕（印）（印）

承応二癸巳季九月吉日 附与牛薰

（西明寺所蔵）

テツカニナシタ夏ナリ、

亦雪峰火^ノ焰上^ノ時^キ火^ノ焰上^ノ向^ト云^ガ導師^ダ、亦火裡ニ在ル本心

ダ、死人^ダ、法輪^ヲ転ズルト云^ワ、火^ノ焰裡^ワ円相中^ニ窠屈^ダ、夫

レハ死人斗リ^ダ、活^ハ處^ガ無クテ^ワ、法輪^ヲ点^ズ、死^ヲ点^ジテ生

ニ帰シタゾ、呈ニ死生^ニ二ツ^ヲ知ラズ^ンバ燒松ワフ^ラレマイ^ゾ、

先ツ拈花ノ時^ワ花^ヲ拈ズルガ^ノ燒松也、ナセー^ハ、心花^ヲ拈ジタ

ゾ、心花^ワ圓相也、亦タ微笑^ガ死人也、死人微笑^ヲ本覺^ノ迦葉^ニ

アテタゾ、至覺^本覺^一致^ノ時^キガ同時成道^ダ、摩訶大迦葉^ニ附

属ト云^ワ、大ワ一人ト云^心ダ^呈ニ、死スレバ^{釈迦モ達磨モ}一人

ダ、ナセー^ハ、同条雖^ニ生^キ、同条ニ死セヌ^ゾ、向見レバ人^々ト

自ノ伝授^ダゾ、諷ヨク世尊三昧不^レ知ニ世尊^ニゾ、亦タ鍼^ヲデフル

時^ワ、世尊拈ジタガ鍼^ワタゾ、ナセー^ハ、此ノ鍼子^ヲ以^テ仏種^ヲ

耕^{ガシ}タゾ、微笑^ワ土穴^口「タゾ、八万ノ大衆^ワ皆ナ死^ニ処不知安

内^ダニ依テ黙タゾ、曹洞機^ノ時^キモ、樓閣トワ火屋^ノ棺内^ミ、冥^タ、千

家ト云ワラシナベテト云心^ダ、月ハ心月^{「タ}、江湖ト云ワ^ノ鳥野^ノ

辺ノ「タ」、貴人モ高人モ下賤者モ尽クアツマルヲ云タゾ、万里

ト云^ワ、生ヨリ死ニ至^ル迄^テ、路次スガラノ□タゾ、秋ト云ワ本

位^ダ、芦花ト云ワ四百四病^ヲ受^テ死^ルニ依テ、是レワ尽タゾ、

亦化生ト云テ、朝ニ生ジテ暮ニ死スルモ在ルゾ、是レヲ不尽ト

云タゾ、然レドモ無^ニ異色^ト云^ワ、烟^ノ色^ワ別色無イ^ゾ、呈ニ

至^ル覚^ノ世尊モ本^ニ覺^ノ迦葉モ烟^ノ色^ワ一ツタゾ、白鳥ト云ワ白骨^ノ

ノワ皆ナ白鳥下^ル、亦樓閣を円相ニアテ^タ、千家ヲ死人

ト号シタゾ、千家ト云ワラシナベテト云心^タゾ、雪峰トキヨメ

于時寛永四丁年六月吉日

伝附天牛首座

（西明寺所蔵）

玉穂叟（花押）

（端裏）下炬之参

下炬之参

先下炬ノ參ヲ問タカ、続松ノ參ヲ問タカト勘弁スル也、ドレモ一ツ也、学者ニワ一字透出シヤウト請也、伝授後ノ參ナ呈ニ、一字透出シヤウ^ヲ、代^ニ坐具^ヲ急度拈^メ、亦上エニ急度指シ拳ル也、其コニ著語^ヲ、代^ニ堅窮^ニ三際^ニ、横亘^ニ十方^ハ、此十方也、又三界一心也、一円相也、亦二頭^ノ鵝^ノ火^ノ色^ニ、師資相逢^ニ法^ハ、是レニ同ジキ也、伝授ノ時^キノ続松引導ノ火二ツ無キ也、一本ハ今時エトボス、一本ハ久遠エトボス^ヘ、古今一本也、是レワ殊勝ナ夏デヲリヤル、別ニ夏ワ無ケレ共、乍去是レヲ問ワ

ネバ下炬ヲセヌ者ナ呈ニ、門徒徒ノ証拠デ走
前總持慈広八世玉林諸珍叟（花押）

于時寛永四丁年六月吉日 伝授天牛首座

(西明寺所蔵)

于時慶長十四己酉十月廿六日

中看果日、火裡汲法泉

喝一喝

抛下火炬云、

前最乘住理琴書（花押）

本稿より、小田原市香林寺所蔵の切紙類も併せ紹介することになつてゐるが、香林寺所蔵の葬送関係の切紙には他と比較して極めて特色あるものがいくつか見出される。たとえば次に紹介する慶長十四年（一六〇九）理琴の書写にかかる「火把」の切紙は、恐らく檀越と思われる「直通俊去信女」という法名をもつものに対するものであり、こうした特定の人に対して行われた儀礼が切紙として伝えられるに至ることは非常に珍らしい。

（端裏）理琴火把

有茲直通俊去信女寿位、予預被求火把之偈、吾其應需尔云、即打一円相云、

即仏即心非外辺、靈台明鏡自然円、形容淥洒任閑歩、不老長生億万年、

夫以直通俊去信女寿位、
心住仏地、不樂世緣、

生平隨夫如鴛与鴦、終生疎縁有時、憶念生死無常之事、親近善知識而前以透脫生死之兩頭、直到如木実忽極祖師禪、即參到無上菩提正覺位也、雖然與麼、直通俊去信女、百年後火光三昧之一句子作廢生、

この「理琴火把」の切紙に関連して、同日に書写された「直通」という法名（諱）を与える趣旨の切紙も存するが、在家者に法名を与える法を実際の例によつて示す、極めて特異なものである。ここでは「台山婆子」とか「趙州勘婆」と呼ばれる公案（『從容錄』第十則、『無門關』第三十一則）の「薦直去」という老婆の言によつて、直通俊去という法名が与えられたことを示したもので、女性に与える法名として極めて理にかなつたものとなつてゐる。下炬とは無関係のものであるが、一連の切紙として次に紹介しておく。

于茲有丈夫之公女、予投菴被求法号与諱、吾脩不辭其法号称直通、其諱名俊去、故者、僧問婆子、台山路向何處去、婆云、薦直去、云云、為之本拠者也、更以偈偈一絕爾云、

離遲速獨超前後、活步自由仏祖先、因憶台山々下路、村婆透過得安禪、

于時慶長十四己酉十月廿六寅

(三)

く。

(端裏) 入棺切紙
忘灵授戒之作法也

死人 剃髮偈云、剃除鬚髮、當願衆生、

永離煩惱、究竟寂滅、

沐浴偈云、沐浴身軀、當願衆生、

身心無垢、内外清淨、

衣服偈云、清淨衣服、當願衆生、

過去惡心、成仏得道、

服帶偈云、檢掇集善、當願衆生、

說令到彼、岸惠命竟、

以上紹介した下炬關係の諸切紙の、特に参の部分は、儀礼執行者としての禪僧自身の心得が追求され、香林寺所蔵の「曹洞機切紙」や「続松之切紙也」に見られるように、他派の參をも気にしながら、曹洞の宗旨としての拈提や領解の仕方が求められているが、一方、密教的諸要素や淨土教の来迎思想の援用、さらには民間信仰としての北枕の民俗など、多様な諸慣習、習俗が渾然として取り込まれており、中世の中期から後期、戦国期にかけての曹洞宗展開の力となつた根源的因素を暗示しているかのごとくである。

さて、遺体は荼毘に付された後、取骨、安骨、安位（位牌を立てる）諷經などの諸儀礼が執行されるが、これらに関する切紙は元和・寛永期頃までの切紙資料にはあまり見出せない。この項のしめくくりとして、次に遺体の剃髪にはじまり取骨、安骨、墓所建立に至る諸儀礼の際に儀礼執行者である導師が唱えなければならない偈文を一覧にしたものを持としておく。これは香林寺所蔵、寛永十五年（一六三八）長円所伝のもので、中に含まれる「亡灵授戒之作法」⁽⁵⁸⁾は、すでに紹介した「没後作僧」に関するもので重複するが、香林寺所蔵切紙の紹介という意味もあるので、以下に全文を掲げてお

○先對亡靈安椅子於中央、有棹子一脚、掌裳衣兼掛之、香爐明燭立造花瓶灑水器入清水、香爐明燭之間置之、次導師教授師同時入導師道場、先燒香可沈香纖香等也、次教授師立椅子左辺、次導師合掌偈教授同音唱也、所謂送音之偈云、○但以衆生法々合成此身、々起時不言我起此法滅時不言我滅、冥前拈袈裟鉢盂、教授師代亡靈戴之、次導師終向椅子禮拜出、上不修正戒相、下不取邪念心、曹洞家嫡々相承之時專這為大壹伝授者也、

日本總持開山、二代紹碩代々至今伝授之、

入棺偈、當願衆生、乘棺中十地菩薩持國閻達、引接安養、極樂世界當証菩提正覺位、

死人出時偈、十方仏土中、影現仏菩薩、

称新亡冥、速証菩提心、

捨煩惱身、當願衆生、
指火時之偈、得清淨身、皆成仏道、

身骨捨道、當願衆生、
取骨之偈、永証菩提、成仏得道、

聲聞縁覚、當願衆生、
安骨之偈、弟子永捨、入無上道、

以大円覚、亦云、無三寶所、
墓所立文、為我伽藍、住持三寶、

于時寛永十五年九月吉日

報恩現住長円叟

十三仏信仰の歴史的成立過程や日本における史的展開については別に論じられなければならないが、『十王經』などによる道教の十王信仰とも密接に関連し、日本では特に淨土思想や地蔵信仰との関係から死後の忌日と追福が結びつけられて十三仏信仰が大きな発展をとげるにいたる。すなわち十王信仰とは、冥道における十王にはそれぞれ本地仏が配され、中陰の七日毎の忌日に經典を読誦して死者の冥福を祈念するもので、その配当は次のようなものである。

初七日 秦江王（本地、不動）

二七日 初江王（釈迦）

三七日 宋帝王（文殊）

四七日 五官王（普賢）

五七日 閻羅王（地蔵）

六七日 高成王（弥勒）

七七日 太山王（藥師）

百ヶ日 平等王（觀音）

一周忌 都市王（阿閦）

三回忌 五道転輪王（阿彌陀）

また十三仏信仰もこれと同旨のものであるが、多少配当が異なるのでこれも次に掲げておく。

伝統的な村落における葬儀においては、かつて、不動明王、釈迦、文殊、普賢、地蔵、弥勒、藥師、觀音、勢至、阿彌陀、阿閦、大日、虛空藏の、諸菩薩如来の画像を一幅あるいは三幅にした、俗に十三仏の掛軸（十三仏曼荼羅ともいわれる）を寺から借り受けて、靈棺の背後にかける慣習があった。これは十三仏信仰と呼ばれるもので、最後の三仏が阿閦・大日・虛空藏という密教的仏で占められていることにも端的にあらわされているように、真言宗で重要な位置を占めている信仰であるが、禪宗でも古くから十三仏の援用は見られる。⁵⁹

二七日 不動秦江王

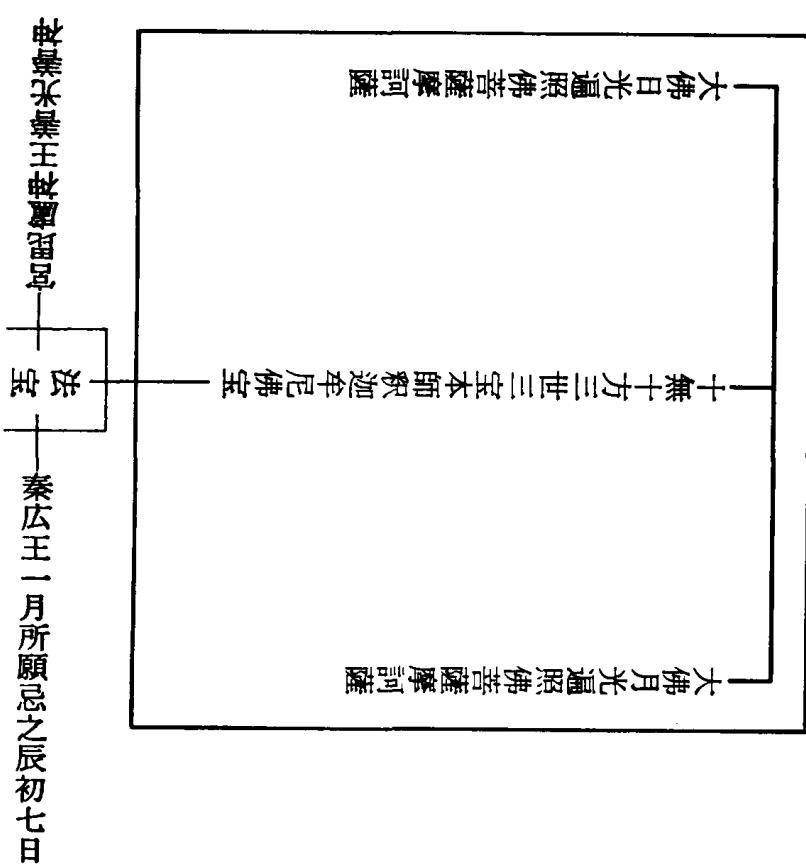
三七日	文殊宋帝王
四七日	普賢五官王
五七日	地藏閻王
六七日	弥勒變成王
七七日	藥師太山王
百ヶ日	觀音平等王
一周忌	勢至都市王
三周忌	阿彌陀五道轉輪王
七周忌	阿閦蓮上王
十三年忌	大日拔苦王
三十三年忌	虛空藏慈思王

これら本地仏のうち、特に地藏菩薩が冥界地獄の王である閻魔王の化身とされたことから、末法思想ともあいまつて中世以来独自の発展を示し、単に六道能化の主たるにとどまらず、道祖神（サエノカミ）や賽の河原信仰の習俗、さらには子供の地蔵あそびの習俗に見られるような、日本のシヤーマニズムとの習合も果すという多彩な展開を示した。曹洞宗の教団展開の過程においても地蔵信仰は摄取され、これを本尊として葬送儀礼が行われる例もあったことはすでに指摘した。⁽⁶⁰⁾

忌日や年忌の考え方は、インド的伝統の中の思想と、中国的服喪の思想が結びついたものであるが、初七日から七七日までの忌日のために七本の塔婆を一連にした、いわゆる七本

塔婆が葬儀に際して建立されるのは、この十三仏信仰の援用で、中世以来の葬送儀礼において重要な役割を果したことは疑いなく、切紙にも十三仏関係のものが数種見出される。必ず、十三仏と忌日年忌、それに、これと対応する諸王、諸善神を一覧にしたものがある。正龍寺所蔵、江戸初期書写の「十三仏大夏」をはじめにかかげる。

（端裏）十三仏大夏



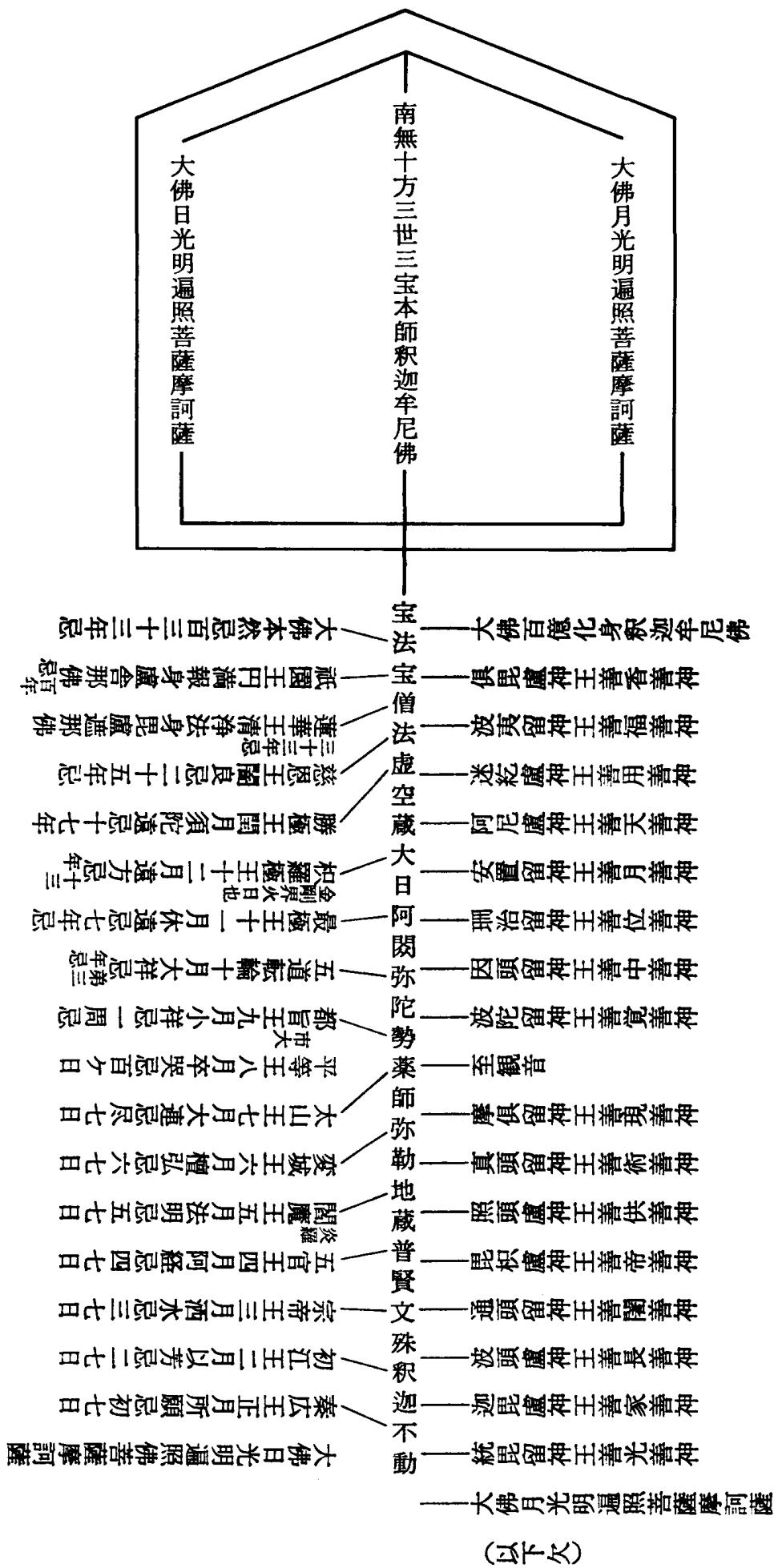
佛國天王	祇園王円満報身盧舍那佛百年忌
大佛本然忌之辰百三十三年	

僧虚空大日	初江王二月以芳忌之辰二七日
宗帝王三月洒水忌之辰三七日	
五官王四月阿經忌之辰四七日	
閻魔王五月法明忌之辰五七日	
變成王六月檀弘忌之辰六七日	南無十方三世佛、本師大仏釈迦牟尼仏、大仏光明遍照仏世尊湧出阿弥陀仏大日世尊、五十六億七千万歳三会之曉十方虛空仏、 <small>(四) 犬大三宝哀愍納受來臨影向當来、</small>
太仙王七月大練忌之辰七七日	下生弥勒會仏、光明遍照仏世尊、十方八万諸聖哀愍攝受護持伝受、大仏究竟久遠空劫前、大仏日月來光天地開闢角、今月今日
平等王八月幽若忌之辰百ヶ日	大仏釈迦弥勒付屬大仏法伝受了畢、
都旨王九月小祥忌之辰一周忌	
五道転輪王十月大祥忌之辰三年忌	
寂極王十一月休廣忌辰七年忌	
枳羅極王十二月十三年忌	
勝極王閏月十七年忌	
慈恩王月輪忌之辰廿五年忌	
蓮華王清淨法身毘盧舍那仏十三年忌	

また、永光寺所蔵のもので、後部は欠落しているが、元和、寛永期の一連の切紙類の中から、「十三仏切紙」(仮題)も次に掲げる(次頁)。

さらに、十三仏を一図に示し、各忌日年忌と対応する仏・菩薩に関する参を掲げる、西明寺所蔵、寛永十五年、天牛所伝の「十三仏之切紙」と、龍泰寺所蔵の『仏家一大事夜話』の中から、十三仏に関する参を次に掲げておく。なお「十三仏之切紙」は、図の「釈迦牟尼仏」と、反対向に書写された「二七日」が線で連結しているが、今は組版上、参の部分を

〔十三仏切紙〕



別出した。『仏家一大事夜話』はすでに全文を紹介したので重複することになるが、十三仏の参の例として一括しておく。⁽⁶¹⁾

勢至ニ相丁用ヲ、日月光リモ不到処デ走、何トテ、良輝、久ス、師云、畢竟ヲ、代、牛頭案尾上、豈備ニ大陽、

中世曹洞宗切紙の分類試論(+) (石川)

(端裏) 十三仏之切紙

夫レハ何トテ、代、今マワ^{アラシ}ノ二字達テ走、師云、

日十
不動相丁用ヲ、一息切断時節境界ヲ焼却シ忘念ヲ縛殺
メ走、夫レハ何ントテ、息ヲ引ツ切ル時節テ走、薦ク
ニ走ルト云テドコエヤラシメタ、代、本空エヤラシメ

テ走、本空ヲ、代、一円相ヲ作ス也、

日十三
虚空藏相丁用ヲ、手ヲ開テ見セシム、夫ノ心ヲ、代、

総ニ在^テ此中、円也、卅三回ニ相当受用ヲ、鴉鳴雀噪シ
タモ別デハ走ヌ、夫レハ何ントテヤラ涼シヤ、畢竟
ヲ、一点梅花藥、三千刹界香、

日十二
不動相丁用ヲ、一息切断時節、四十九季説法ヲ携エ
走ヌ、誰ガ听イタ、虛空ト虛空ガ听イテ走、

日十二
文殊相丁用ヲ、一息切断時知入り走ヌ、智慧ワドコヨ

リ求メタ、自然智無師智如來智テ走、夫レハ何トテ放
下シタ、此ノ時ヨリ放下ノ走、畢竟、放下着、

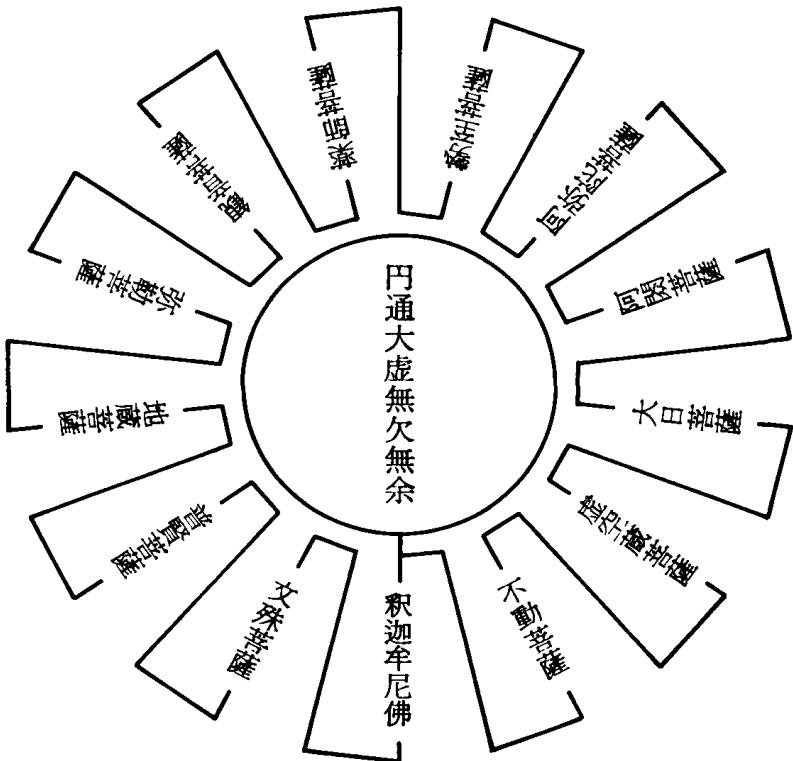
日十四
普賢相丁用ヲ、換骨境界テ走、白象ヲ尽大地見タト
キ、別ニ呈イ露シ用ズワ走ヌ、何ントテ、代、頭々
上物々上ガ普賢、白象テ走、畢竟、代、只去ル也、

日十五
地藏相丁用、今コソ境界ヲ卒度醒ス処テ走、何トテ
代、虛空陰々トノ錫杖音達テ走、地藏手中玉、不老妙
藥走、何ト甜タゾ、一息一境甜テ走、

日十六
弥勒相丁用ヲ、此ノ境イ弥勒樓閣ヲ開テ走、弥勒ニ相
見シ用ヲ、本ト何ソニモ無イ処ヲ相見シテ走、畢竟ヲ、

見シ用ヲ、本ト何ソニモ無イ処ヲ相見シテ走、畢竟ヲ、
看時不^レ見暗昏々、

乾坤大地ニ第二人無シ、十二神守護シ用、十二時中夫
也、



句ヲ、代、岩上無心、風來吟ズ、
夫レハ何トテ、代、今マワ^{アラシ}ノ二字達テ走、師云、
阿闍相丁用、合掌ヤアラトウトノ佛ケヤ、夫レハ何ト
テ、代、修證ノ御僧也、師云、畢竟ヲ、代、只ダ去ル
ヘ、
大日ニ相丁用ヲ、此ノ灵光ガドコヲ照シテ走、夫ノ灵
光ヲ、代、虚ニノ灵、空ノ妙テ走、師云、金剛界・胎
藏界、代、陰陽和合テ走、師云、句ヲ、代、柳緣花一
也、

コクニテ守護ノ走、十二時、守護シ用、柳花見、此人ア

走、

日ノ里 観音相丁用ヲ、浦陀岩上本ト付イテ走、三十三身ニ現ジ用ヲ、ヨク意識ヲ拂ウ処ア走、夫レハ何トテ現ジタソ、声色ガ現ジテ走、

于時寛永十五戊季仲春吉日良辰 天牛九拝

(西明将所藏)

十三仏參、第一不動ヲ、代、無心無念ノ時キテ走、師云、其証拠ヲ、代、一念不生、全體現ス、師云、何ントテ火烟ヲバ立テタソ、代、智光ヲ発シテ走、師云、死人ノ請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、罪業ヲ燒却シ妄想ヲ縛接シテ走、師援、□時如何、代、後念□ゾント切テ走、師云、サウンドコエヤラシメタソ、代、本空エヤラシメテ走、師云、何ントヤラシメタソ、代、作、一円相、師云、救イ羊ヲ、代、良久ス、師云、其証拠ヲ、代、空合、空、以上九位、

△第二釈迦ヲ、代、法界円満ノ仏テ走、師云、証拠ヲ、代、トツコモ此一仏テ挂テ走、我鬼畜生修羅人天共ニ余ルモナク欠ル「モ走ヌ、師云、死人請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、一字不説テ走、師云、時節ライエ、代、申ウトシタハ誤テ走、師云、サテ云イテハ、代、トツク申テ走、師云、誰レカ聞イタソ、代、空カ聞イテ走、師云、救イ羊ヲ、代、一仏成道ノ時、乾坤大地森羅万像、有情非情共ニ救イテ走、師云、畢竟ヲ、代、一念心中ガ無相無形ノ一仏ノ同体テ走、以上八位、

△第三文殊、境界ヲ、代、大智カ文殊ノ境界テ走、師云、大

智、代、天地人仏衆生ト始ヌ、先キノ智テ走、師云、ドヨリ發生シタソ、代、心ヨリ發生シ、□師云、請取羊ヲ、代、一息截断ノ時節、智恵モ利根モ入り走、又師云、其ノ智□ヨリ求メタソ、代、自然智無師智カ如來ノ智見力テ走、師云、其智ヲドコエ放下シタソ、代、一息截断ノ時節、能ク捨テ走、師云、救イ羊ヲ、代、坐禪一会ノ時、尽虛空徧法界カ本師本仏テ走、七位、

△第四普賢ノ境界ヲ、清白円明ノ処カ普賢ノ境界テ走、師云、其ノ境界ヲ、代、ヒツト坐下ノ端的テ走、師云、其ノ境界ヲ、代、末爰カ普賢テ走、師云、請取羊ヲ、代、良久ノ云、末爰ガ普賢テ走、師云、普賢ノ境界ヲ呈露セヨ、代、兀坐ノ端的、尽大地カ一ヶノ白馬白象テ走、師云、白象白馬ヲ、代、尽大地ガ其儘ト見タ時、別テハ走ヌ、師云、畢竟ヲ、代、悟リ一点テ走、以上七位、

△第五地藏ヲ、先ツ地ヲ、代、尽大地カ井ノ一智テ挂テ走、師云、藏ヲ、代、諸仏衆生森羅万像モ爰ニ収リ爰ヨリ出テ走、師云、爰トハトコラ云タソ、代、法地テ走、心ワ仏法ノ地ト云心也、師云、請取羊ヲ、代、其ノ境界ヲ引カヘズ、其儘心空ニ引道シテ走、師云、引道シ羊ヲ、代、根本ノ時、地獄モ無ク天堂モ走ヌ、亦虛空陰々トノ錯杖ノ声斗リテ走トモ、師云、地藏ノ手中玉ヲ云ヘ、代、不老ノ妙薬テ走、亦真珠テ走トモ、師云、何ント顯シ何ント服シタソ、代、一息截断ノ界イ顯シ服ノ走、師云、救イ羊ヲ、代、尽十方一果ノ明珠テ走、師、其証拠ヲ、代、ドツコモ此仮性テ挂テ走、九位、

代、一氣未発ノ処ニ徹底ノ走、師云、徹底シ羊ヲ、代、仏法不現前、不得成仏道、師云、請取羊ヲ、代、一息截断時節、弥勒ノ樓閣ヲ推開ノ走、師云、弥勒ニ相見シ羊ヲ、代、根本□至テワ何レニモ無ケルヨト相見シテ走、師云、畢竟ヲ、代、衆生無キ処ガ仮性テ走、師云、仮性ヲ、代、過現未共ニ一仮心性テ拄テ走、以上七位々、

△第七薬師ノ本体ヲ、代、餓鬼——天祖仏凡夫草木土石ノ命根命脈トナリ、亦精魂ト成テ走、師云、瑠璃ノ壺ノ持シ羊ヲ、代、乾坤必塞ス、師云、請取羊ヲ、代、一息截断時節、病即消滅シテ走、師云、消滅シ羊ヲ、代、寂滅為樂テ走、師云、(衍カ)十二神出テ不老不死ノ一人ヲ、代、乾坤大地第二人無、師云、十二神出テ守護シ羊ヲ、代、其レニ守護シテ走、師云、其レニ守護シ羊ヲ、代、柳緑ト守護シ、花紅イト守護シテ走、師云、救イ羊ヲ、代、尽大地ガ一藥テ走、此時キ地獄ハ走ヌ、八位々、

△第八観音ノ全体ヲ、代、一寸ト見一寸ト聞イタ時、徹底觀

音テ走、師云、徹底シ羊ヲ、代、無心無念ノ時キ処々觀(音テ)走、師云、請取羊ヲ、代、トツコモ補陀洛山ト見タ時、罪無罪トモ円通普門□テ居テ走、師云、觀ヲ、代、ミル当位テ走、師云、音ヲ、代、聞ク当位テ走、師云、証拠ヲ、代、端的ヲ失スル時テ走、師云、三十二ノ相ヲ現シ羊ヲ、代、能ク識情ヲ尽セバ色々ニ出現シ種々ニ流通シテ走、師云、救イ羊ヲ、代、トツコモ円通□見タ時、極樂ナラン処ハ走ヌ、以上八位々、

▽第九勢至本体ヲ、代、根本ノ一心テ走、師云、夫レハ何ントテ、代、根本ノ一心テ走、師云、夫レハ何ントテ、代、本師本仏テ走、師云、汝カ境界デハトコテ見タソ、代、無心無念ノ

時キテ走、師云、請取羊ヲ、代、日月ノ光リノ至ラヌ処エ導イテ走、師云、導キ羊ヲ、代、良久ス、師云、其ノ心ヲ、代、端坐一念ノ時、久遠ヲ越テ走、師云、救イ羊ヲ、代、迷モナク悟リモ無イ処、導イテ走、師云、迷悟ナイ処ヲ、代、仏モ衆生モ隔テハ走ヌ、

△第十阿彌陀ノ本体ヲ、代、過去久遠劫ヨリ尽未來際迄尽テキガ無量寿仏テ走、師云、証拠ヲ、代、無心無念ノ時、此ノ境界ヲ歷□去リモゼズ來リモシ走ヌ、師云、罪人ヲ請取り羊ヲ、代、此境界ヲ離レタ時ドッコモ唯心淨土テ走、師云、其レハ何ンタル時節ソ、代、四十八願モツキテ何ニモナイ処テ走、師云、其レハ何トテ、代、只阿吽ノ二字迄テ、走、師云、其証拠ヲ、代、南無阿彌陀ノ声ハカリテ走、師云、罷參ヲ、代、岩上無心風來□レタ迄テ、走、師云、救イ羊ヲ、代、只南無阿彌陀仏迄テ走、師云、又一羊ヲ、代、□陀仏□滅無量罪、師云、畢竟ヲ、代、更參卅年、以上九位、

△第十一阿閦仏ノ心ヲ、代、トツコモ此一仮性テ拄テ走、師云、其レハ何トテ、代、キット良久メ、末此端的テ走、師云、請取羊ヲ、代、学合掌シテ、ア、タウトノ仏ケヤ、後生助ケテ給ワレ、師云、其レハ何トテ、代、ヤラタウトノ御声ヤ、亦、ヤラ修証ノミ声ヤトモ、師云、畢竟落居ヲ、代、只去也、師云、救イ羊ヲ、代、末此ノ境界カ本覺法身蓮心城テ走、師云、畢竟ヲ、代、法尚應捨、何況非法、

△第十二大日ノ全身ヲ、代、本地法身仏テ走、師云、本地法身仏ヲ云ヘ、代、至学本學、田十二位ノ仏々祖々、有情衆生、智明々タル光明ヲ學テ走、師云、請取ヲ、代、トツコモ此冥光

テ照ノ走、師云、灵光ヲ、代、虚ニノ冥、空ノ妙ナリ、師云、妙処ヲ、代、父ノ一滴ノ露カ母胎エ滴ラヌ先キテ走、師云、金胎ノ両輪ヲ、代、天ト始リ地ト分チ、陰ト通シ陽ト和合シテ走、師云、和合シ羊ヲ、代、天地人ノ境界カ金胎本体テ走、師云、証拠ヲ、代、柳緑花紅、^{ナリ}師云、救□□^{(3)(羊)}ヲ、代、徹底性ノ時キ沙汰ハ走ヌ、

△第十三虚空藏ヲ、代、尽乾坤徧法界、此一仏性ニハラマレテ走、師云、虚空藏ニ徹底シ羊ヲ、代、良久メ、末此ノ当頭テ走、師云、請取羊ヲ、代、虚空々々ノ会ヲナサレバ即法身、々々ノ会ヲ不^レ作即虚空テ走、師云、極重惡業ノ救イ羊ヲ、代、不會ノ凡夫ガ即聖人テ走、師云、虚空藏ニ相見シ羊ヲ、代、キツト良久メ云、只コレ^レ、師云、其ノ心ヲ、代、總在此中円^{ナリ}、師云、吊イ羊ヲ、代、只呑只歌ヘ、師云、其レハ何トテ、代、孝滿テ走、師云、三十三年回向シ羊ヲ、代、有為空無為空畢竟空テ走、師云、畢竟落居ヲ、代、何ント説イタモ、皆アトテ走、師云、行李、代、何ソニモナイ処テ走、師云、供シ応シ羊ヲ、代、春ハ百花ト應供シ、夏ハ涼、風秋、月冬雪ト應供シテ走、師云、諷經シ羊ヲ、代、鴉鳴雀噪、一々妙音テ走、「」畢竟如何、代、摩訶般若波羅蜜、師云、扶ヶ羊ヲ、代、舞ウツ歌ウツサイツサミレツシタ時扶テ走、師云、扶リ羊ヲ、代、何者カ有テ扶リ走ゾ、師云、畢竟十三仏ヲ一句ニ云持來レ、代、根本一仏ニシテ二仏ハ走ヌ、又師云、猶モ子細ニ、代、畢竟幻亡テ走、以上十八位、當門徒秘參^レ、

(龍泰寺所蔵『仏家一大事夜話』)

これら十三仏の各尊に対する參の内容についてはここでは触れないが、いずれも葬儀に密接な関係をもつて拈提されてることは『仏家一大事夜話』の内容からも看取される。⁽⁶¹⁾

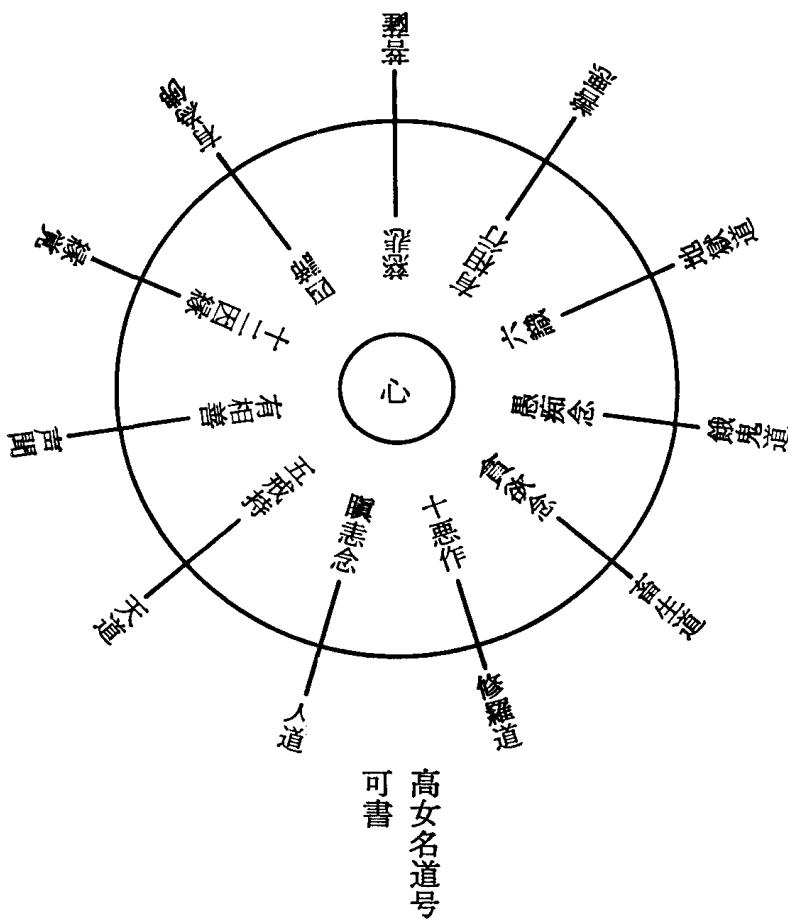
十三仏信仰はこのように中陰（中有）やさらに来世に対する信仰、観念によって支えられているが、さらにこの中陰の後にインド的輪廻の思想に基づき、六道あるいは十界に転生することが想定されている。勿論、仏教の基本的立場としては、死後の生存に関する問題は十四無記あるいは十四不可記に含まれる問題であり、これに固定的確定的な答えを出して來生を明言することはあつてはならないことであつたが、すでにインドの仏教史においても仏滅後數世紀を経ずして五道や六道の輪廻思想と習合し、これに関する經典も成立する。さらに大乗仏教では、迷いの世界とされた地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六種の世界の上に、声聞界・緣覺界・菩薩界・仏界の聖者の世界である四種のさとりの生存を想定し、六凡四聖という「十界」の説を生み出すに至る。このうち特に六道の苦しみの生存、就中淨土教の極楽世界に相対する地獄界への恐怖の觀念は、來生に対する強い関心となつて人々を仏教に結びつけ、中世仏教各派の飛躍的展開の大きな原動力となつた。この六道や十界に関する切紙も存するので、次に紹介する。

まず、十界に関する基本的認識を示す切紙としては、香林

寺所蔵、寛永十三年(一六三六)、是尊所伝の「十界切紙」を掲げる。ここでは十界の果の原因が、それぞれ、六識—地獄道、愚痴念—餓鬼道、貪欲念—畜生道、十惡作—修羅道、瞋恚念—人道、五戒持—天道、有相善—声聞、十二因縁—緣覚、慈悲—菩薩、四諦—有為仏として示される。

(端裏) 十界切紙也

從如淨禪師為附与直□□者也、永平道元和尚より代々嫡々流傳者也



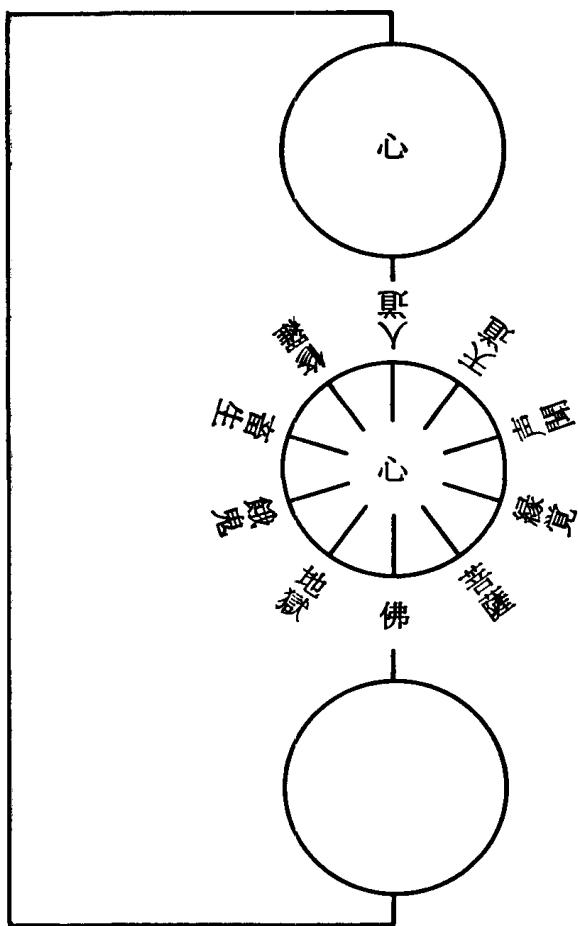
告寛永十三丙子六月吉日 附与是尊老納
(印) (印)

次に紹介する永光寺所蔵、寛永十二年の娛良所伝の「十界之図」は、十界の果の原因是説かず、参ではむしろ十界の差別は本来無いもので、一心、無差別の靈境であるとするのは禅的な把握の仕方といえよう。

(端裏) 十界之図

一心十界、亦十界一如、亦一心三觀、

私心ノ三点ガ三々九界也、横鉤ガ仏界也、故十界十云也、一心ヨリ十界ト分テ亦根本、本心ニ納ル也、是ヲ十界一如トモ、成仏トモ云也、妙ハ一漚ノ先ニアリ、無物ノ根本也、十界本隔テナシ、即今無差別ノ靈境也、



皆慶長拾九年春初伝伝授焉、為後代伝書之者也、

今寛永十弐年二月廿八日、於当重書之畢、

洞谷永光現住久外嬪良叟（花押）

地獄ノ出ヤウヲ、拳ノ云、閑事、
地獄定ヲ、拳云、今生ガ地獄デ走、

地獄ノ破リヤウヲ、拳云、一息截断デ走、

しかし、やはり来世に対する関心はこうした第一義的見解だけでは民衆宗教としては不充分と見なしたものか、依然として常識的意味での六道説が一般に受用されたと見られ、六道を六地獄と見なして説く例もある。次に紹介する広泰寺所蔵の「六地獄」と題する切紙がそれで、六道の生存の特色が示される。

（端裏）六地獄
六地獄

地獄在甚処、代云、三界カ地獄デ走、□□□甚麼三界ガ地獄デ
ワアルゾ、代云、思ウ様ナイガ地獄デ走、
餓鬼道ヲ、代云、乞食非人デ走、
畜生道ヲ、代、禽獸ノ類ガ畜生デ走、
修羅道、代云、軍陣ガ修羅デ走、
人道ヲ、只アリノ半人デ走、
天道ヲ、拳云、内裡デ走、
八寒地獄ヲ、拳云、四方八方ヨリ寒ヲ以責ルガ地獄デ走、
八熱地獄ヲ、拳云、四方八方ヨリ熱ヲ以責ルガ地獄デ走、
閻魔王ヲ、拳云、諸司代デ走、

般若多羅尊者、諸人皆転經スルニ、尊者一人為甚麼ニ転々セヌゾ、者
云、坐禪ノ正當大經ノ転ジヤウタソ、此時經ニキワマリナイン、衆
縁トハ目前万境タリ、蘊トワ五蘊界タリ、坐禪ノ正當身心共ニ脱落
ノアツカ忘然ノ時、

ここではさらに八寒地獄、八熱地獄の様相も説かれるが、餓鬼道を乞食・非人に、天道を内裡に、閻魔王を諸司代に比定するなど、現実の社会世相に合わせて実体的に理解させようとする姿勢は注目される。結論としては「今生ガ地獄デ走」という禅的な表現に帰着するが、現実の社会事象と対比させて説明する方法は当時の身分社会を実体的固定的にとらえる方向を押し進める思想にしかなり得ない。こうした思考の端的な例が十來說である。十来とは、『大集経』などの経説に依拠しながら説かれる十種の因果の由来という意で、現世で行った善惡の行為の果報が来世に実現するという考え方であり、さらに、現実の生存の種々の状況を、過去世の善惡の行為の果報であるとして、先に掲げた「十界切紙」と同様の思想を、現実の社会現象に合わせて説明する原理を説くもので、この説についても切紙があるので、永光寺所蔵、慶長十九年（一六一四）呑（嬪）良所伝、寛永八年（一六三一）再写のも

(端裏) 十来図

十来図 大集經之文也

モシヒトヲモバサトリシヤン	了ニ知上	三世一切仏	モシヒトヲモバサトリシヤン	了ニ知上	三世一切仏
若人欲々	二知上	三世一切仏	自忍辱來	自憲貪來	高生トモ
一端正者	一端正者	一端正者	自禮拜來	下賤トモ	一端正者
二貧窮者	二貧窮者	二貧窮者	自謹慢來	高生トモ	二貧窮者
三高位者	三高位者	三高位者	自誹謗來	自憲貪來	三高位者
四卑賤者	四卑賤者	四卑賤者	自不信來	下賤トモ	四卑賤者
五瘡瘻者	五瘡瘻者	五瘡瘻者	自慈悲來	長壽トモ	五瘡瘻者
六盲聾者	六盲聾者	六盲聾者	自牧生來	短壽トモ	六盲聾者
七長命者	七長命者	七長命者	自破戒來	六根不具トモ	七長命者
八短命者	八短命者	八短命者	自持戒來	六根具足トモ	八短命者
九根闕者	九根闕者	九根闕者	自持戒來	六根具足トモ	九根闕者
十具根者	十具根者	十具根者	自持戒來	六根具足トモ	十具根者

私、十來變相は元為ニ一心所也、心直ナレバ万般障無シ、心愚曲ナレバ惡縁ニ牽テ惡所墮ス、唯貪欲ヲ離テ我ヲ捨てシ、我ヲ真ノ道人云也、此文、沙門ノ龜鏡也、時々刻々不忘レ之、性アリドホリト云字也、立心偏生字ヲ書事ハ、本心發生シテ分別取捨ノ迷悟ヲ明了スルハ心ノ得也、生ヲコル、イケル、ナル、アラハル、ウゴク、タスカル、心ハ主、生境界也、

貴慶長十九春初伝授之 洞谷現住呑良(花押)
今寛永八年南呂吉日、於洞谷重書之者也、

天台地獄之話

この十來說の主旨は、現實の善惡の行為が來生における幸不幸の原因となるので、現世における善根功德を積む倫理道德的行為の勸奨という意味を有するとも見られるが、むし

師云、經論明ニ地獄、如何是地獄、弁云、娑婆地獄テ走、サラバ句ヲ著ケ來レ、弁云、三界無安猶如火宅矣、師云、サラハ逆マニ地獄ニ落處ヲ云ヘ、弁云、出胎ノ時逆ニ落テ走、師云、赤鬼白鬼ニ責ラル、處ヲ云ヘ、弁メ云、父ハ白鬼、母ハ赤鬼也、此二人ノ口責ヲナケレバ生レソウヌ、師云、八寒八熱ノ有苦

る、現實の貧富や身分差別の境界の説明理論であることは紛れもなく、特に盲聾、瘡瘻、その他の現實の身体的欠陥(根不具)の説明理論として使用される時は、責任の取りようのない過去世の行為なるものの結果として現在の不幸を甘受しなければならないという、現實差別の容認を強要する思想であることは明らかである。こうした思考が仏教の業論の援用であることはすでに指摘した所であり、さらに、身体的な欠陥である根不具が不淨視されて、障害者差別の根拠となつたことを併せ考慮するなら、十來說を説く切紙も差別切紙と見なすべきであろう。

いずれにしても來世に対する思考、特に地獄に対する觀念が種々の形で存し続けたことは事実で、永光寺所蔵の「天台地獄之話」は、その典拠を他派の伝承に求めた例であり、曹洞宗の切紙成立の由來を立証する一資料でもあるので、次に紹介しておく。ただしこの切紙の書写年代は不明である。

落、弁ノ云、父ノ八識母ノ八識デ走、師云、夫ハ何トテ、弁ノ云、母ノ姪ハ赤色ナル故ニ火々、父ノ姪ハ白色ナル故ニ水々ル依テ、父母ノ八識色心ノ寒熱相合テ八寒八熱ノ依身ヲ出生ス、師云、赤白水火ノ証拠ハ、弁云、赤キハ日天ヨリ火ヲ取り、自己ハ月天ヨリ水ヲ取ルニ依テ、日月ハ父母ノ二姪、寒熱ノ二火、師云、去レハ姪水ハ淨カ不淨カ、弁ノ云、清淨々、二姪即日月ノ精ナル故、依テ古人男女以ニ姪水曼陀羅ヲ書ニ、放光云云、師云、苦ハ如何、弁ノ云、苦ニツアリ、此界苦即苦々、亦一息引ニ切時此界ノ名残有、是苦々、師云、其苦ハ何者カ受ク、弁ノ云、色身ガ受テ走、師云、去其苦何者持來与タゾ、弁ノ云、本分ハ苦樂ヲ知リ走ヌ、師云、理性地獄ヲ云ヘ、弁ノ云、無念仏果、一念起ル處理地獄デ走、師云、念付テ云ヘ、弁云、前惡起是レ地獄、後念苦起是レ相離テ走、師云、地獄ノ釜ヲ云ヘ、弁云、母ノ下ロテ走ト、師云、益ヲ云ヘ、父露レ之ト云、亦大事心得アリ、口伝五位、

※ 地獄の問題に関連して重要な課題は、血の池地獄に関する女性の墮地獄の問題、および「河原根本之切紙」にも見られる『血盆経』と女性差別の問題が残るが、これについては稿を改めて論じたい。

また、葬送儀礼に関する切紙としては、滅後の追善修福、施餓鬼、さらには墓所の問題が残るが、これについては次回を期したい。

また本稿から、小田原市香林寺住職松田文雄師（本学文学部教授）の特別の許可を頂き宗宝調査会調査収集の同寺所蔵の抄物切紙類もあわせて紹介する機会が与えられた。すでに見たように、切紙研究の上では欠くことのできない貴重な資料が含まれており、資料の閲覧掲載に御快諾を与えられた学恩に対し、厚く御礼を申し上げる次第である。

注

- (51) 『太平御覽』（北宋太平興國八年～九八三▽成立の類書）の
礼儀部には、死に統く諸儀礼として、屍・復魂・哈・絞紵衾
冒（以上卷五四九）、殮、柩・殯・帽・賻・襚（以上卷五五
〇）、棺（卷五四一）、椁・櫬・芻靈・明器・明衣・祖載・
娶・紺・旅旒・旐・挽歌・方相（以上卷五五二）、葬（卷五
五三～五五六）、冢墓（卷五五七～五六〇）、弔（卷五六一）
等の項目が立てられている。

- (52) 周一良「敦煌写本の書儀に見える唐代の婚礼と葬式」(『東方学』第七十一輯、昭和六十一年一月) 参照。

(53) 『涅槃經』後分卷下や、『長阿含遊行經』、『大般涅槃經』卷

下等の説。なお葬列の内容や次第については仏教各派に独自の特徴がある。

- (54) 「無常偈」は、釈尊が因位の菩薩であった時、雪山童子となつて羅刹に身を投じて供養し教えられたという偈(『大般涅槃經』卷十四)。なお部派仏教時代には『無常經』という、葬儀のための短経も成立した。注(3)参照。
- (55) 『菩薩所胎經』卷七(大正一二、一〇五七頁b~c)の所説。
- (56) 前稿、及び注(28)参照。
- (57) 前稿で紹介した『看聞御記』応永二十四年二月十五日条などに見られる。
- (58) 摂稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(4)——追善・葬送供養関係を中心として(中)」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』四五号、昭和六十二年三月)参照。
- (59) 十三仏信仰に関する研究には、服部清五郎「十三仏信仰と板碑」(『板碑概説』所収、昭和八年九月、鳳鳴書院刊)、川勝政太郎「十三仏信仰の史的展開」(『大手前女子大学論集』第三号)、植島基行「十三仏について(上)(下)」(『金沢文庫研究』第二三四、二三五号、昭和五十年十一月、十二月)など多くの業績がある。真言宗との関係については、中村雅俊「十三仏信仰の成立について——空海の入定と虚空藏求聞持法」(『御影史学論集』第六号、昭和五十五年十月)がある。
- (60)(62) 前掲摂稿。なお地蔵信仰と中世曹洞宗の地方展開との関連については、摂稿「中世仏教における菩薩思想——特に曹洞宗における地蔵菩薩信仰を中心として」(『日本仏教学会

年報』第五十一号、昭和六十一年)参照。

(61) 摂稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(2)——龍泰寺所蔵『仏家大事夜話』について」(『駒沢大学仏教学部論集』第十四号、昭和五十八年十月)参照。

(62)(63) 摂稿「中世曹洞宗切紙の分類試論(4)——曹洞宗における差別切紙発生の由来について」(『駒沢大学仏教学部論集』第十五号、昭和五十九年十月)参照。